

発車のアナウンスが流れた時、隣の席はまだ空いていた。

出張帰りの新幹線は、時間帯もあって車内はゆとりがあった。最後尾の窓側の席に滑り込んで、買ったばかりのコーヒー缶を膝の上に置いた。このまま誰も来なければいいな、とぼんやり思いながら流れていく駅のホームを眺めていた。

隣に人が座ったのは、発車の直前だった。

(あ……)

思わず視線が動いた。目が合うと、隣に座った男性がにっこりと笑った。

少し童顔で、笑うと前歯がちょっとだけ見える。歳は自分より下に見えた。でも整っている。

くっきりとした目元、すっと通った鼻筋、輪郭のラインが驚くほど綺麗だ。ラフな格好をしているのに、顔だけがやけに映える。

(うわ、かっこいい……)

思わず二度見しそうになって、ぐっところえた。

「お姉さん、お隣失礼します」

「……え、はい」

へらりと笑って、荷物棚にバッグを放り込んでいく。

私は前を向いて、コーヒーを一口飲んだ。気にしなければいい。隣に座っているだけの他人だ。名前も知らないし、これから先も知ることはない。

(とはいえ気になる……)

座席の幅が思ったより狭いせいで、肩がほんの少し触れそうな距離だった。肘掛けに腕を置くと、指先が当たりそうになって思わず引っ込める。向こうは気にもしていないのに、自分だけがいちいち意識してしまう。

スマートフォンを開いたが、画面の文字がぜんぜん頭に入っていない。トンネルに入るたびに窓ガラ

スに車内が反射して、そのたびに視界の端に隣の横顔が映り込んでくる。さっきまであんなに気楽そうに笑っていたのに、今はイヤホンを片耳に差したままぼうっとしているようだった。その横顔がまた、整っていてかっこよかった。

（こんなに顔のいい人、久しぶりに見た……。ずっと考えちゃう。なにかして、意識を散らそう。本でも読もうかな……）

「長距離ですか？」

「え？」

「なんか、荷物多いし」

急に話しかけられた。ちょうど私が本を出しかけたタイミングで、なんの前置きもなく。

「……実は、出張の帰りで」

「あー、お疲れ様です。どこまでですか？ 早く家に帰りたいですね」

「そうなんですけど、終点までなんです」

「それは奇遇ですね。俺も終点までなんで♡」

にっこり笑う。歯が少し見えた。人懐っこいというか、距離感が最初からない。でも不思議と嫌じゃなかった。

それからしばらくは、たまに短く言葉を交わした。彼は有登(ゆうと)といい、大学院生だそう。少しチャラく見えたから、正直意外だと思った。会話は思ったよりも続き、肘掛けに置いた手が、揺れるたびに触れそうになった。

そのまま一時間くらい経って、私はトイレに行きたくなった。

「あ、すみません。ちょっと前通ります」

「あ、どうぞどうぞ」

通路を抜けて、デッキへ向かう。走行音が大きくなる。個室のドアを引いて、滑り込んだ。

狭い空間に、轟音が籠もる。

ドアを閉めようとした、その瞬間、扉がガッと開

かれていく。

（え、）

狭い個室の中に、有登くんが入ってドアが静かに閉まる。続いて、鍵をかける音が、やけにはっきり響いた。

「——ついてきちゃった♡」

「っ……え、」

振り返ると、有登くんがにこっと笑っていた。さっきと同じ顔で。でも目が、全然違う。細い目の奥が、じっとこちらを見ている。

「な、なんで……」

「なんか、お姉さんのことずっと気になって♡」

「……ッ、」

「ちょっと、二人になりたいなって♡」

悪びれない。謝らない。「二人になりたい」の一言で全部済ませて、またへらっと笑っている。なのに声は低くて、さっきより一段落ちていた。

走行音が個室の壁に響いて、外の音を全部遮断している。車内の喧騒も、アナウンスも、なにも聞こえない。聞こえるのは自分の呼吸と、有登くんの、落ち着いた息遣いだけだ。

(大声出せばいい。叫べばいい)

わかってる。そうすればいい。

「……出てください」

でも、言えたのは、それだけだった。迫力なんてどこにもない、小さな声だった。

「そんなこと言わないでくださいよ♡」

(近い。近い……！)

そのまま有登くんの手が伸びてくる。服の上から、胸の方に。

「っ……やっ」

「大きい♡」

むにゅり♡

確かめるみたいに、両手で包まれる。潰すんじゃないで、形を覚えるみたいな触り方をされた。逃げようとする壁があって、身体が密着して、走行音がトイレの壁に籠もって外の音を消していく。

「やめ、てっ……あ、んッ♡」

「シャツめくっちゃおっと♡」

「っ……やめ、めくらないで……ッ」

反射的に両腕でシャツの裾を押さえる。でも有登くんはその手首をそっと持って、壁に押しつけるみたいに払いのけた。

そして背後からするりと手が回って、今度はシャ

ツの裾から手を入れて、素肌に触れてくる。

「ッ……！」

「すべすべ♡」

服の上からと全然違う。直接触れる指の温度に、
びくっと肩が揺れた。

有登くんの手が腹から上へと這い上がって、ブラ
の縁に指がかかった。その感触に思わず息を詰める。

「ホック、外していい？♡」

「ダメ……っ、です」

「そっか♡」

カチッ♡

「っ……！」

ブラのホックが、あっさり外れた。